

【コメント】

他者認識と自己省察の「境界」

藤石 貴代

新潟大学人文社会教育学系

20世紀前半の朝鮮近代文学を専攻する評者が、趙寛子氏の研究に特に着目するようになったのは、プログラム記載の略歴にある「日中戦争期の『朝鮮学』と『古典復興』-植民地の『知』を問う-」（『思想』2003年3月）の前後に発表された、「韓国歴史学会の『民族主義批判』に関する試論-歴史／認識の『境界』の間で-」（『思想史研究』2002年3月）および「植民地帝国日本と『東亜共同体』-自己防衛的な思想連鎖の中で『世界史』を問う」（『朝鮮史研究会論文集』第41集、2003年10月）における、著者の次のような問題提起や指摘に強く共感したからである。様々な専攻の外国人研究者が集う今回のシンポジウムで、趙寛子氏の発表内容が相当専門的であり、今日初めて趙先生の研究に接する方も多と思われるので、一読者として、氏の問題意識を以下にまず紹介したい。

今日、日本の「教科書問題」を批判することと、韓国の民族主義を内側から批判的に省察することは別々のことでなくなった。「他者認識」が「私の自由」を「審問」する行為として自覚されるようになった。日本ナショナリズムに抗するだけではなく、「反日感情」を刺激し「愛国心」を動員する日韓のナショナルな対立構図を批判する声が同時に聞こえるのである。（中略-引用者）日本と韓国、過去と未来、保守と進歩、他者認識と自己省察の『境界』を往来し、その「間」をつなぐような歴史認識の可能性を考えてみたい。¹（下

1 趙寛子「韓国歴史学会の『民族主義批判』に関する試論-歴史／認識の『境界』の間で-」『思想史研究』2002年3月、205頁。本稿の表題は下線部によった。

線は引用者)

反共産主義の立場で日本との連携を模索し『漢奸』として排斥されるようになった汪兆銘は、「東亜協同体」論が、「経済侵略を以て根幹となし、軍事侵略を以てこれを助けた」西洋の侵略主義と変わらないと警戒した。(中略-引用者)「東亜の改造」を唱える日本の呼びかけは、政治的党派性を離れて中国人の誰にとっても、新しい占領軍を解放軍に粉飾する陰謀にしか聞こえなかったのである。政治的立場の異なる他者同士が協同できるためには、自己中心的な強権を貫く姿勢を変えなければならない。

(中略-引用者)「東亜協同体」論のような歴史認識のもつ問題は、資本と軍事力の膨張に依存する覇権的な<力の政治>を世界秩序のための道徳的名分として正当化したことにある。そのような<力の政治>が卑怯なのは、弱者の抵抗を逸らしながら、強者との衝突を恐れるためである。(中略-引用者)中国を侵略しながら、欧米帝国主義や共産主義からの「共同防衛」を主張する。東亜新秩序における中国の自発的な協同は、帝国日本が欧米帝国主義との直接的な戦争を回避して勝利するための最善の道であった。²

趙寛子は、「日韓のナショナルな対立構図」を煽りかねない韓国の民族主義、その「『受難』を克服してきた『民族協同体』の『生命力』に対する『愛情』」³を批判し、韓国の進歩的知識人を代表してきた白樂晴の「韓国の『分断体制』の克服が『脱近代』の世界史的意義を遂行する」という主張も、日本帝国主義の「東亜協同体」論と同様、「近代的」言説のパターンに陥った「自民族中心主義」の変奏に

2 趙寛子「植民地帝国日本と『東亜共同体』-自己防衛的な思想連鎖の中で『世界史』を問う」『朝鮮史研究会論文集』第41集、2003年10月、34頁。

3 前掲、「韓国歴史学会の『民族主義批判』に関する試論-歴史／認識の『境界』の間で-」、207頁。

過ぎないと見る⁴。このような趙寛子の批判の根底には常に、朝鮮の民族主義が内包せざるを得なかった「帝国日本との共犯関係」を剔抉する意志がある。

一九三〇年代以来の植民地朝鮮の民族運動は、帝国の支配秩序の中で生存の道を求めて、帝国主義とともに拡大してきた。（中略・引用者）帝国の拡大に刺激・動員される植民地の民族主義・民族運動は、帝国の植民地主義に連鎖され、両者の間に「敵対的な共犯関係」⁵を結ぶこともあったのである。⁶

今回の発表においても、趙寛子の批判の視線は、植民地朝鮮の「朝鮮魂」「朝鮮学」研究でさえ、言わば「『帝国』日本の学知」の中で成立したものであり、「日本帝国主義と真正面から対立した『国学運動』のイメージは、『暗黒』から開放された後の歴史による『発見』にすぎない」（本文22頁）ことに向けられる。ともあれ、「帝国主義の知の支配を受けつつ、それと競合しながら、『東洋文化・帝国文化』に回収されないように、朝鮮学は自らの活路を開かざるを得なかった」（本文23頁）。趙寛子の指摘によれば、「『満州事変』以降、帝国の国策としての学術研究は、満洲から中国大陸全土、さらに南アジア研究へと移り、朝鮮研究の独自の重要性は、相対的に下落」し、そのような「帝国における『朝鮮研究』の緊迫性が薄れた政治文化の余白に、朝鮮人による自発的な『朝鮮学の独舞台』が作られた」（本文24頁）という。さらに、今では南北ともに「国民的文化財」となった古典文学作品「春香伝」についても、「帝国に翻訳されるプロセスを通して、春香伝は、自由を求める民衆精神の普遍的な典型、あるいは朝鮮の文化的・倫理的伝統としての地位を確保」（発表文7頁。以下の引用もすべて同じ）したのであり、「満州文学と朝鮮文学の日本語翻訳は、たんに帝国の文化統合に貢献するだけでなく、日本文学に新鮮な刺激をあたえる可能性としても歓迎」されたのであった。しかし、「帝国主義の世界史的な競争のなか、日本の文化統合は、西洋中

4 同上、209頁。

5 林志弦（「朝鮮半島の民族主義と権力の言説」『現代思想』2000年6月、126頁）の用語。前掲、「植民地帝国日本と『東亜共同体』-自己防衛的な思想連鎖の中で『世界史』を問う」、29頁の脚注（2）参照。

6 同上、28頁。

心の普遍主義に対抗できるように文化の多中心性を意識的に擁護しながらも、通底には天皇制民族主義（日本精神）を強制した⁷のために、「翻訳によって可能になる文化的共栄を裏切る方向に傾き」、「『日本精神』の無限な増殖を欲して、『文化=普遍=翻訳』の放水路を防いだ結果、帝国日本の国語文化もみずから暗黒を迎えた」と結論付けられている。

評者の質問は、次の二点である。

趙寛子に一貫する「敵対的な共犯関係」を暴く視線が捉えた今回の発表の主旨に同意するが、結論部分の「帝国日本の国語文化もみずから暗黒を迎えた」とはどういう状況を指して言うのか補足説明を願いたい。朝鮮では、日本の「新体制」と時を同じくして、御用新聞でない朝鮮語新聞は1940年8月に廃刊され、朝鮮文雑誌も統廃合の結果、真珠湾攻撃の前月に創刊された「半島唯一の文化雑誌」は『国民文学』と命名された。しかし、敗戦後の竹内好らによる「国民文学」論争では、わずか数年前、植民地朝鮮に「国民文学」運動（台湾には「皇民文学」）があったことさえ知らぬかのように、「日本国民文学」の樹立だけが叫ばれている⁷。このような敗戦後の状況から見て、植民地や外地の文学が翻訳流入しないからと言って、帝国日本の国語文化が「暗黒を迎える」に足る自意識を持っていたか疑問だ。

二点目は、今回の発表内容から離れるが、「民族主義の生命力」批判の際に著者が脚注で言及している丸山真男『日本の思想』（岩波新書、1961年）当該頁の、よく知られた次の文言に関してである。

（前略-引用者）過去は自覚的に対象化されて現在のなかに「止揚」されないからこそ、それはいわば背後から現在のなかにすべりこむのである。思想が伝統として蓄積されないということと、「伝統」思想のズルズルべったりの無関連な潜入とは実は同じことの両面にすぎない。一定の時間的順序で入って来たいろいろな思想が、ただ精神の内面における空間的配置をかえ

7 これに関連して、国際日本文化研究センターの鈴木貞美教授より、「国学」「ナショナリズム」「国民」といった用語使用において、それが「いつ」「何に対する」対抗意識なのかを微細に跡付けないかぎり、たとえば、日本帝国主義がまさに大日本帝国として膨張する過程で抱え込んだ矛盾や角逐を捕捉・分析できないという批判をいただいた。

だけでいわば無時間的に併存する傾向をもつことによって、却ってそれらは歴史的な構造的性を失ってしまう。小林秀雄は、歴史はつまるところ思い出だという考えをしばしばのべている。⁸（傍点は原文のまま）

渡邊雅子氏の研究によれば、米国の歴史教科書叙述と教師の語りはともに、「原因・結果」連鎖の把握と、状況判断の適不適の分析を主とするのに対し、日本の教科書叙述は「原因・結果」の連鎖ではない時系列で、状況判断の主体も現れず、教師の語りも「歴史上の人物への共感」を目的としているという、大変興味深い指摘がある⁹。評者はここに上記の丸山真男の言葉と同根のものを感じるが、韓国人の歴史教育・歴史認識のスタイルは日米どちらに近いのだろうか。もしくはまったく異なるのか。お尋ねしたい。

8 丸山真男『日本の思想』岩波新書、1961年、11頁。

9 渡邊雅子『納得の構造 日米初等教育に見る思考表現のスタイル』（東洋館出版社、2004年）および同編著『叙述のスタイルと歴史教育 教授法と教科書の国際比較』（三元社、2003年）』参照。